



始



野 守

(梗概) 羽黒山の山伏、大峯葛城に入らんとて和州へ急く途次、春日野を通り一が、此所の野守なりと言ふ老人來り、傍に澄める水のあるを野守の鏡とて吾等如き者の影を映つすなりと教へ、又た野守の鏡とは、昔鬼神の持ちたる鏡とも聞き及びたるが、此處に棲みし鬼、晝は人となりて野を守り、夜は鬼となつて是なる塚に住みしより此名ありと言ひ、又曾て此野春日野に御狩あり一時、御鷹の行方此水に映りて知れりこともありといろく懇に物語り、眞の鬼神の鏡を見ては恐れやゝ給はんと言ひ残して消え失せけり。山伏いと奇特なることに思ひ其の塚の前にて祈りをなす處に、本體の鬼となりて再現し、非想非々想天までも映つす鏡を見せたる後、大地をかつばと踏み破つて奈落の底に入りけるとなり。



シテ 野守の翁
後シテ 鬼神

ワキ 羽黒山の山伏
所 大和國春日野
季 春

野守

わき一上一引一
次第
苔に雲詠坐む被りや
衣れむわふく
むろん 月は出羽の羽黒山より歩て居
山伏よてひ我大嶺首城のゆまみあふよ
ま、唯今大和路よ赴ひ上、二トリ、一
まの、草木枕マサニ、子にはぬ、一富よ起な

き一麻比國の今更ふちん比月の朝
とまにぬへ行湯う里引の大和乃國ふ
奈良ノ中
湯はり／＼ とるゆ程よ乞はま和別
都よ着てい此處りあばまの日理とや
すひ人をあら訴の名前をもろばせとぞ
んドリて春日野れあれ火乃野ち出

みき六今う炎祖そシお葉つむ上サシ是小
出する老人がは春日神に年を齧て山よ
も通ひ里にも行神ちれ翁までりあり、
上も難や蒸熱氣乃れま云のを三笠乃
山は長閑ふ五度唯識也秋乃風春日
乃里に音信く誠よ摺ひもあなるや

六元ニトニニニニニ、ドマニニニニニ、
神乃ニテニニニニニ、ドマニニニニニ、
ニニニニニニニニニニニニニニニニニニニ
は老の常行也東むたりアモロ
アモロモモソヘあるばモモモモモモモ
上三二ニニニニニニニニニニニニニニニニニ
サ首伸たガタヤ、わが目のを思ひや
ニ、トリノリノリ、アモロモモモモモモ
アモモモモモモモモモモモモモモモ
乃山陰れ月々色亞亞モモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモモモモ

二二二元ニニニニニニニニニニニニニニニニ
寃ハ奈良比鄰の吉日長保之季ニ
サウム
シテ
レモモモモモモモモモモモモモモモモモ
はめりの人も、申まほり、さんせは
春日野の野ちよてゆ、神ちよてゆ
論ヌバ、前乃名前を、あうー右ふべ、
先是よりおけなる水のい、岩ハ何と

や、おまくいぞ　是こそ神ちの境と
て、陽きもひかれてゆへ　あく面白
や、聖ちの境と、いわやう成謂ふくいぞ
我等も、乃聖ちの境をうつはよ依る、
聖守れ境とす、又誠の野ちの境と、
昔鬼神の持、境をこそ、聖ちの境と、

や、あくべてゆへ　おき
鬼神の持、境をば、野ちの境とひゆ
り、昔　昔は聖小住ける鬼もありーが、
肩人ひとへそば、聖をあすま、鬼は又是
なあ様よ、入はおとなり、さすが鬼神の
持、境なまき、さて、聖ちの境とす、あく

下てり ^上わき ^上ぬは神よ住ける鬼の持トを
野シもれ境ヒをしひ 又ハ野シもれ郭シテをう
つせば水ミをも野シ守ムカシ比シテ境ヒと名メニ付ケ ^上わき ^上ぬ説
いづまも謂アハ 神守ムカシ者ハシタを各シテ首ハシタを
今モ ^上わき ^上かくさマサニナリ 湧ヨウ涌ヨウせよ
月^上立タリよりハ實ヒを母ムカシの水ミ漬ハシタ ^上ロニ郭シテ

うつトてトいとトもをトを乃ハシタ波ハシタも濁ハシタ一ハシタづ乃ハシタ
ヤシ実シ見シトトまトの首ハシタ我ハシタそトゑトきト裏ハシタ
やシあシひトもトかハシタあシバシそト古ハシタの神ハシタ比シテ
鏡ミツカミ守ムカシ事トもト年ハシタ古ハシタせ乃ハシタ例ハシタやシ
ぬシもト一ハシタ齋ハシタの神ハシタもトれ境ヒとトやシもトば水ミ
るシ付ケたトる謂アハりトてトキトもトひト水ミ付ケ

トは謂までい わき
けふははく齋も世も
乃境の謂を五物語りへ さて
昔は前ふ
浦翁の有りに浦齋を失ひ家がこ
を易ひひふ一人の聲もありあか
小翁、五齋乃れ清やありてあると五翁
ありに彼翁中哲さん雅号成水の底
小丁我浦齋翁のゆゑりうりみの底に
陞齋もれりべきとて、翁人をうどよりて見
きば、清さくく水底よ 月上
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、
あくぬれ齋翁 木三、四、五、六、七、八、九、
水みうつかる朝あり坐ふぞや齋翁は殊
居る有ける我 トナリテはく齋も

神カミの境カミにて、アラシとひ思アラシひよそあら
らんんと讀アラシトもは傳アラシをうつしゆへなりアラシ
アラシ小脣アラシ時代とて、アラシ時アラシもあがきま日アラシ
神カミの龜火アラシ比アラシ神カミ出アラシ合アラシと教アラシ焉アラシよかは
身アラシあらわ乃アラシおひ生アラシのせ語アラシをすせを
まアラシも汲アラシく水アラシ アラシ口アラシキ上アラシ、アラシ寧アラシやむうアラシの

物語アラシすに付アラシくも誠アラシの神カミの境カミ見アラシせ
然アラシておひよみの五車アラシや、史アラシハ鬼アラシ神カミ乃アラシ
境アラシなまきアラシいりにて、アラシえんまべきアラシ アラシ歎アラシや境カミの
五前アラシきう處アラシ不アラシきにま去日アラシのアラシ神カミと
いふも我アラシなまきアラシ、日アラシ境アラシあどりアラシ、アラシえんせばアラシ
んとアラシ、日アラシ不アラシれアラシでアラシ、アラシ歎アラシや鬼アラシの持アラシる境カミ

なまくば見ゆるもおそれや志高まん誠乃
鏡をうんん事ハクナム浦ノ脇を見
水鏡をうんらへとて塚乃肉よ入ふけり
塚の肉よ入ふタア 中入 わき上
イリキ有難也
物は奇物かあふ事も是行法のがな
里と風ふをを便りにそ思神北往せる

塚の前よく肝臓を碎き祈りあり
我年行化功をつめる其法力の深あら
巴鬼神乃ぬ境界もして象もすき特
を自せぬ南岳歸依佛 生羽 有難
や天地を勧うる鬼神哉感せしめ
大沙山河草木も一佛成道の法味

小ひりきと 日上鬼神よ様なくよりもあ
き神やむれ境へ駆けたりおまかれて
やうちひかやく境の面ようつる鬼神
乃眼比光面をむくへキをうそなき
忍き残りぬんと鬼神、縁よ入るん
トまれば、わき、背く鬼神侍々へ取はまご姫

ウキ後輩せ謹 時富ヒルメ元一
わき法味ようつり残リモトて、まとて殊數を
わきステ、日ム口嶺の雲を凌ギヤア
押ゆんぞ、日ム口嶺の雲を凌ギヤア
年幼の功をつもす、余箇日志を
ノリイ折也ノリイ、
身金マネツをおりまほ採花汲水よ薄
を得も一あんアシタニせいこりニよ俱梨ヤアス

う七犬八太金剛童子　わき一工六
東方　儀　東方　上工三
降ニ世叫玉毛は猿小うつり　月六六三三二
又南西北　ナ
方をうつせざ　トリ　トリ　トリ
八面玲瓏とゆき　トリ　トリ　トリ
日上天、天をうつせざ　トリ　トリ　トリ
ひざさうひざさう天をじ　トリ　トリ　トリ
くまなく　月　トリ　トリ　トリ　トリ　トリ
叔又大地を猿見せば　先
地歟乃　月　トリ　トリ　トリ　トリ　トリ
生るる地ごくの有様をあ

らく乃庵ふそ入るを

十八



著者權所有

昭和十三年六月廿五日印刷
昭和十三年六月三十日發行

定價金五拾錢

著作者 寶生 新

東京市下谷區上野櫻木町四十八番地

東京市京橋區銀座西六丁目三番地
發行兼印刷者

江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流譲本刊行會

383
108

終

